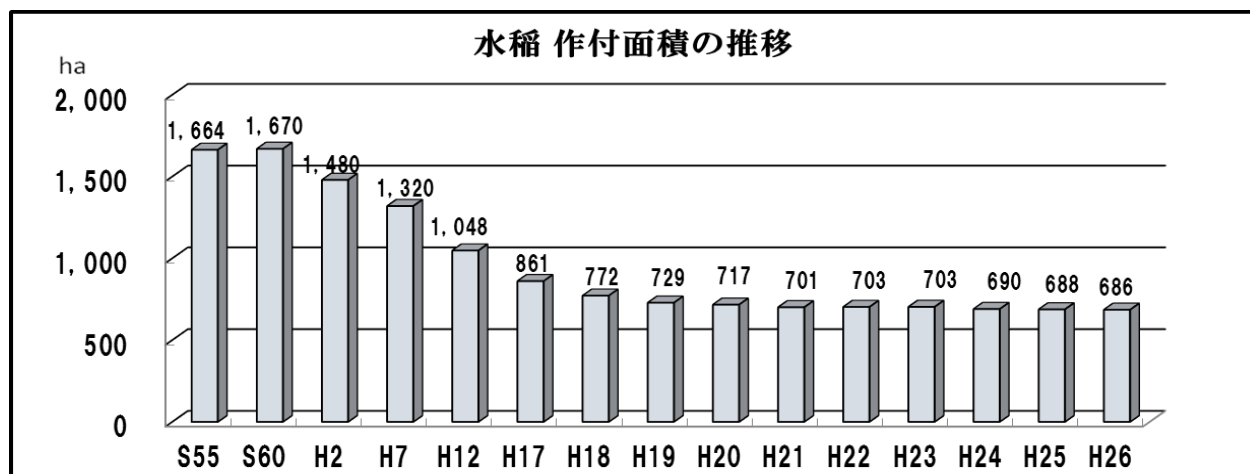


農畜産物の生産状況

1. 水稲

富良野市の水稲作付面積は昭和45年（1970年）からの生産調整によって大きく減少し、平成26年度は685.8haとなっています。



資料：JA ぶらの

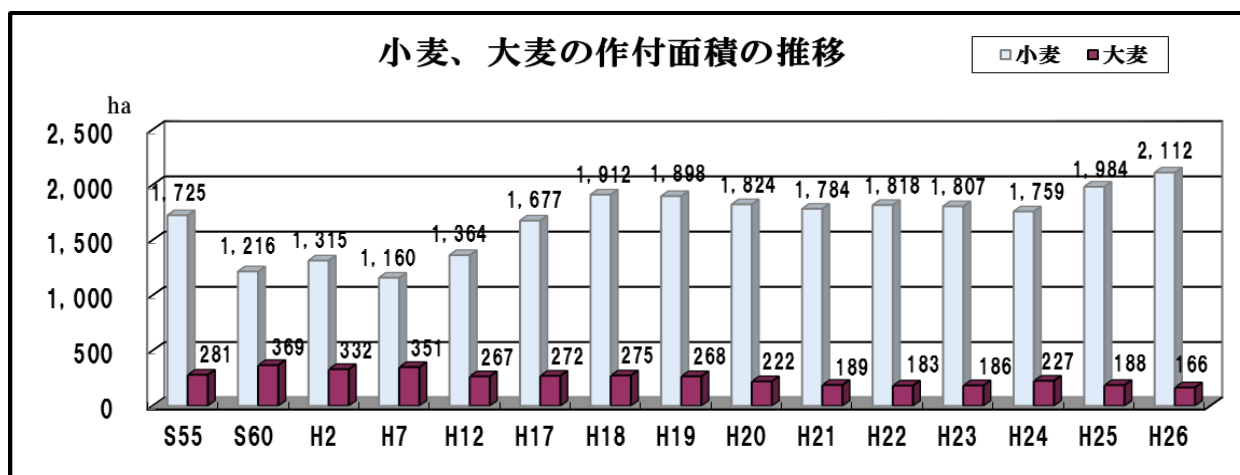
2. 畑作

平成26年度の作付面積は、麦類では2278.7ha、豆類は201.4ha、てん菜は577.7ha、馬鈴しょは206.0haとなっています。

【小麦・大麦】

近年、小麦の作付面積は微増、大麦は横ばいで推移しています。平成26年度は、小麦は2112.3ha、大麦は166.4haとなっています。

生産に当たっては、合理的な輪作体系の確立、基本技術の励行や効果的な防除・施肥等の技術普及などによって、良質小麦の安定生産を確立することが必要となっています。また、実需者（製粉業者など）ニーズの高い春小麦へのシフトが課題となっています。



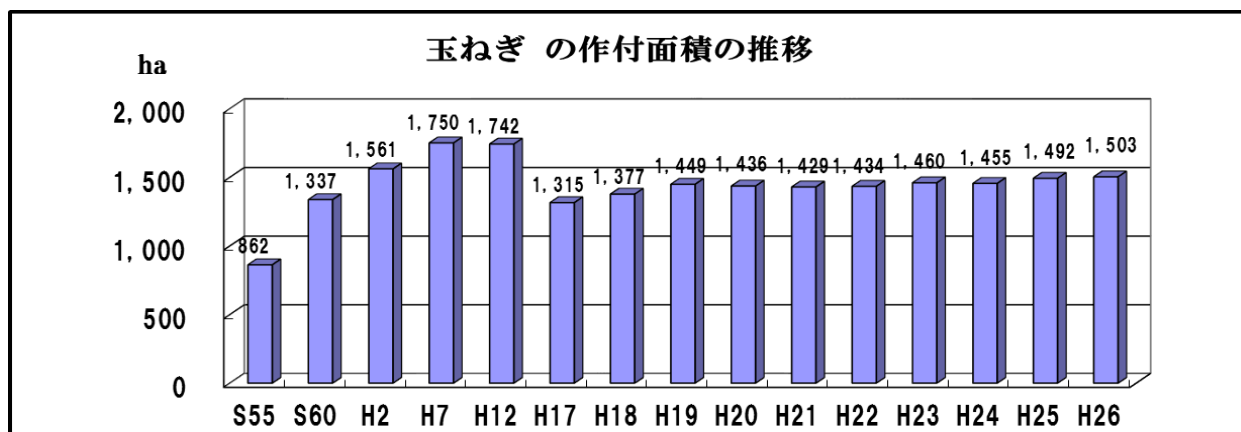
資料：JA ぶらの

3. 野菜

平成26年度の野菜作付面積は3045.8haとなっており、全作付面積の約32.8%を占めています。また、本市は比較的気象条件に恵まれていることから、道内でも有数の野菜の生産地域となっています。

【玉ねぎ】

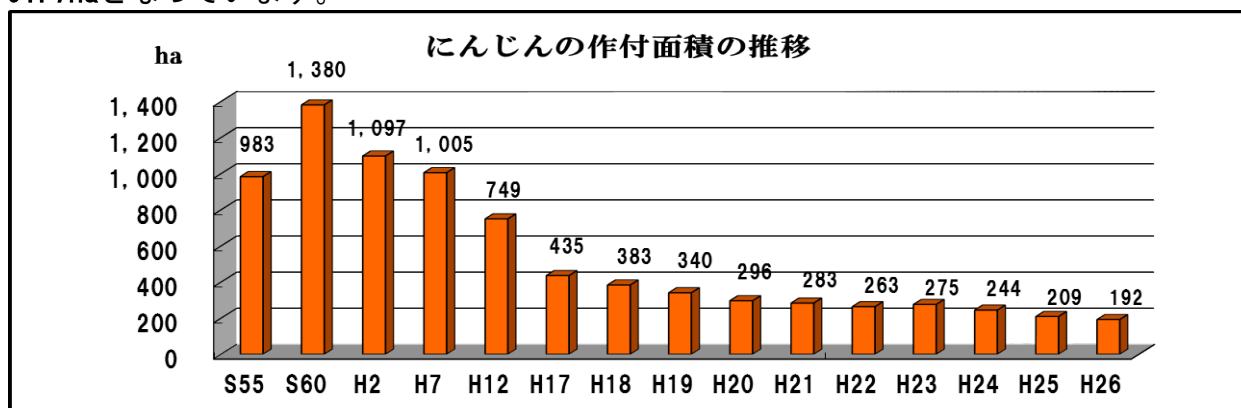
玉ねぎは、昭和40年代から全市的に栽培が拡がり、今日では富良野を代表する農産物のひとつになっており、平成26年度の作付面積は1502.9haとなっています。



資料：JA ぶらの

【にんじん】

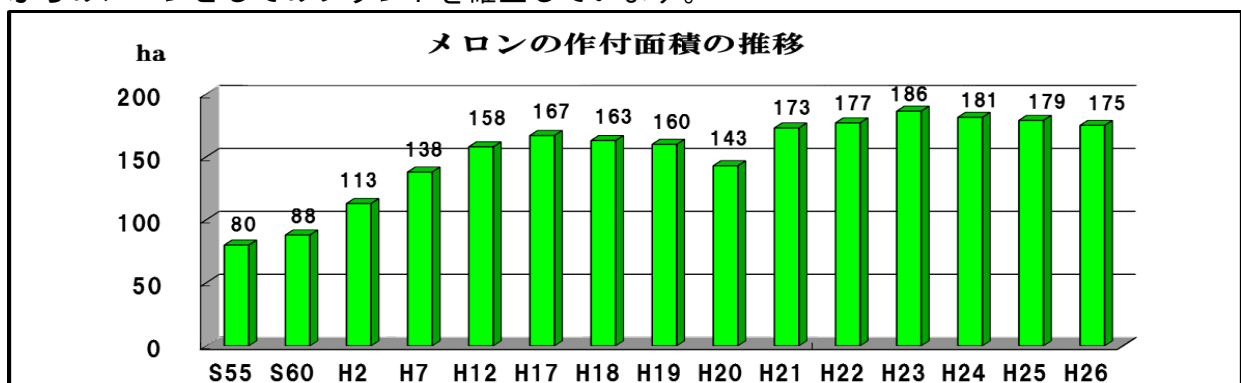
にんじんは、昭和60年度の1,380haをピークに減少傾向にあり、平成26年度の作付面積は191.7haとなっています。



資料：JA ぶらの

【メロン】

メロンは昭和45年頃から本格的に取り組み、平成26年度の作付面積は175.0haとなっています。内陸性気候の特性である昼夜の寒暖の差を活かし、高い糖度と品質を誇っており、ぶらのメロンとしてのブランドを確立しています。

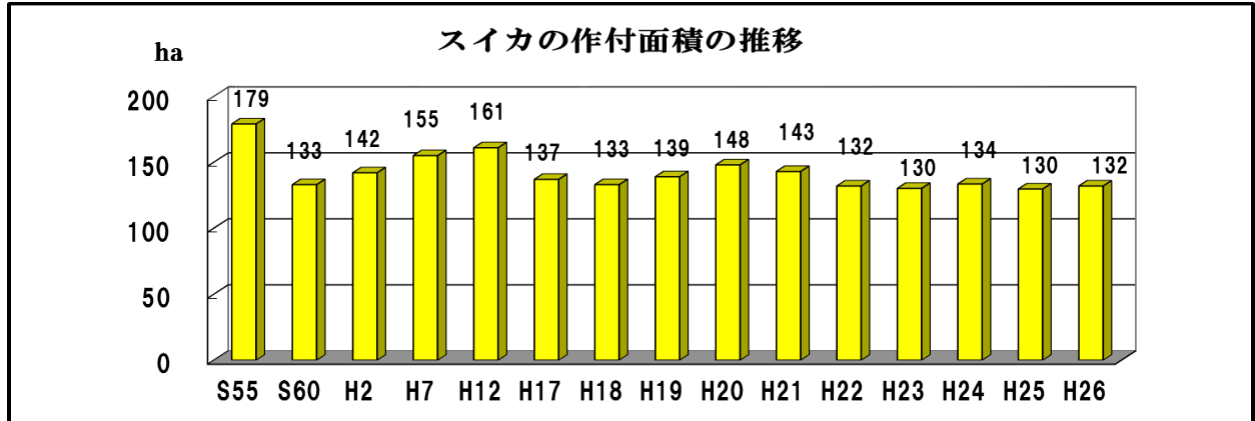


資料：JA ぶらの

【スイカ】

昭和30年代後半、御料地区において果樹団地造成の気運が高まり、りんご・なしの間作としてスイカを栽培し研究したところ、それが他作物に比べ優れていたことから、更に試作・研究を重ね、本格的作付けがはじまりました。

恵まれた地形・地質と気象条件を活かすとともに、栽培技術の改善や栽培方法の研究を重ね、平成26年度の作付面積は132.0haとなっています。



資料：JA ぶらの

【ほうれん草・レタス】

ほうれん草の平成26年度の作付面積は15.1ha、レタスは7.0haとなっています。

【ぶどう】

石礫傾斜地等低生産地の所得増大を図るとともに、未利用地の高度利用を目指すためワイン原料用ぶどうの栽培を推進し、現在では全道を代表するワイン産地が形成されています。富良野地方の気候風土に適した専用品種であるセイベル種を主体に、安定した生産により優れたワインの品質が確保され、現在加工用ぶどうが26.3haの作付がされています。

【スイートコーン】

スイートコーンの平成26年度作付面積は419.3haとなっています。主に主食用が多く、朝採り収穫の徹底と予冷施設の利用により、出荷の平準化を図っています。また、加工用についても増加傾向にあります。

【かぼちゃ】

平成26年の作付面積は240.9haとなっており、早出し出荷や高品質生産に努めています。

【ピーマン・ミニトマト】

ピーマンやミニトマトの導入の歴史は新しく、基本的栽培技術の徹底と労働力・経営形態に即した技術の導入などにより、長期安定生産を進めています。

特にミニトマトは平成26年度の作付面積が19.7haとなっており、新規就農者の中心としても作付されています。

【長ねぎ・アスパラガス（グリーン・ホワイト）】

土づくりを基本に栽培技術の徹底、安定確収や品質の向上などに努め、特色ある野菜産地づくりを進めています。

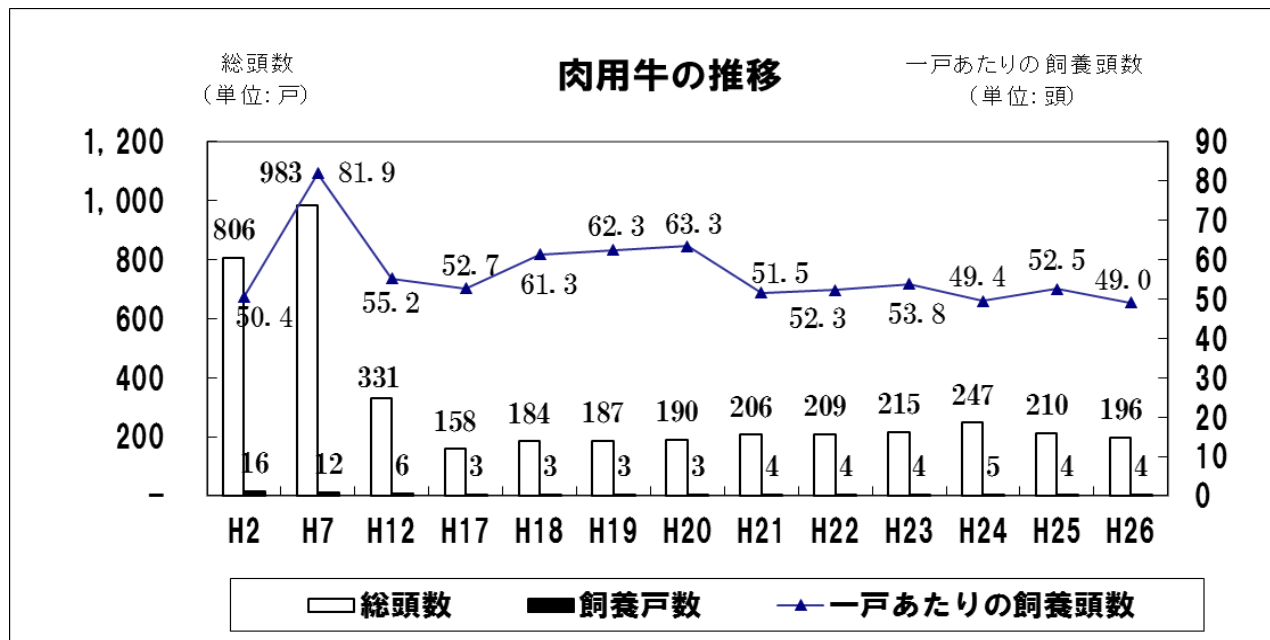
【花き】

今後消費の拡大が期待される作物であり、女性を主体とした生産活動となっています。

4. 畜産

【肉用牛】

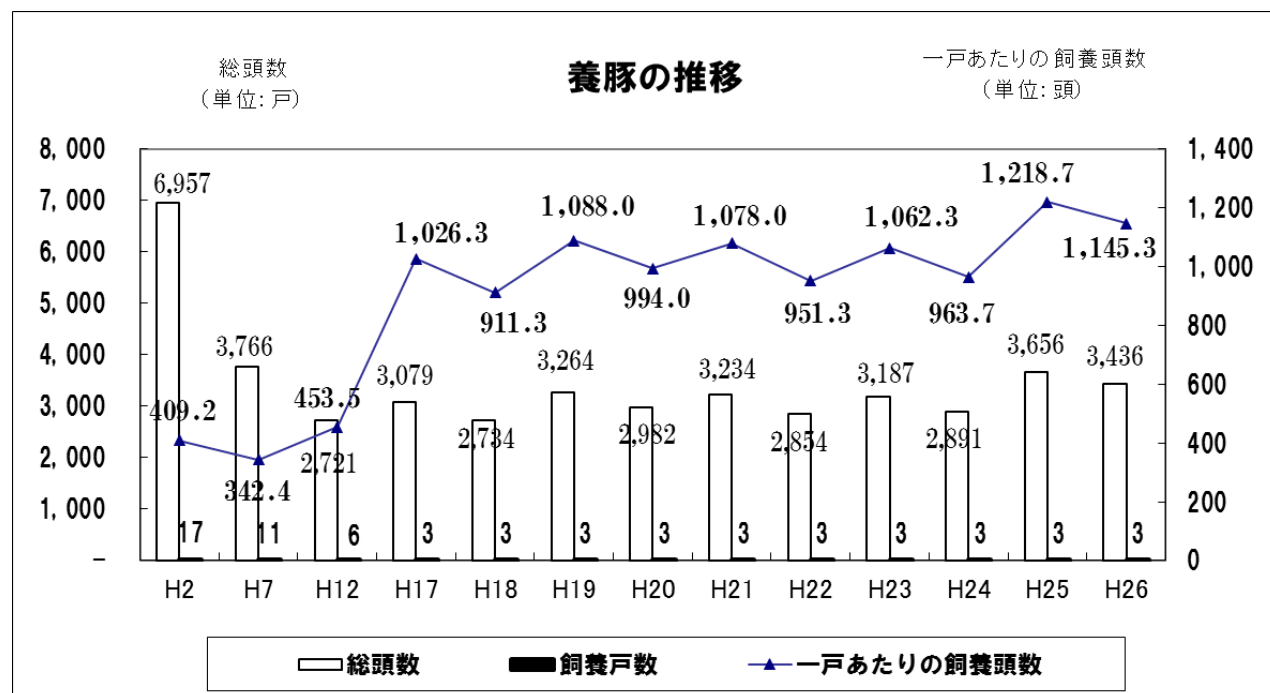
平成 26 年度の飼養戸数は 4 戸で 196 頭とほぼ横ばいで推移しています。JA からの沿線市町村の飼養者と連携し『肉牛改良部会』の組織化や飼料や飼育方法にこだわった『ふらの大地和牛』の生産など積極的に優良子牛や肥育牛の生産販売を進めています。



資料：市農林課

【養豚】

平成 26 年度の飼養戸数は 3 戸、飼養頭数は 3,436 頭とほぼ横ばいで推移しています。近年、PED（豚流行性下痢）が道内でも発生し、発生防止のため、衛生管理基準の厳守など安心安全な取り組みが求められます。

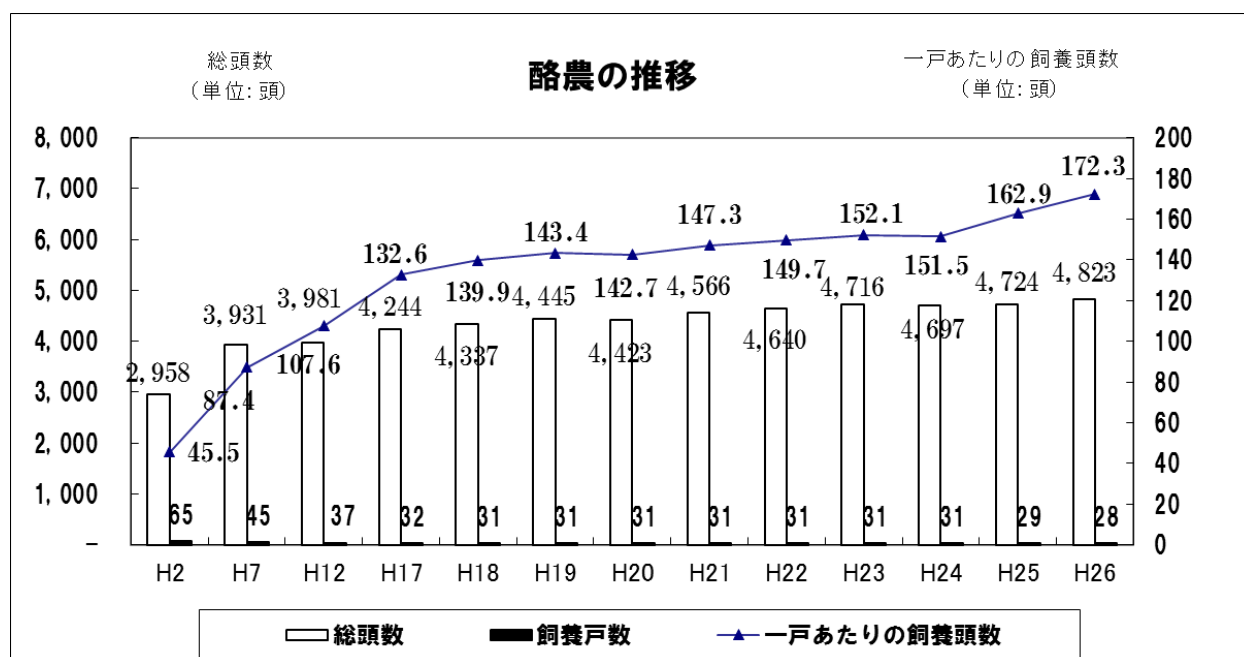


資料：市農林課

【酪農】

平成 26 年度は 28 戸（うち 2 戸は育成農家）で、飼養頭数は 4,823 頭とほぼ横ばいで推移し、1 戸当たりの飼養頭数は約 172.3 頭と増加傾向にあります。生乳生産量は 26,796 t と経産牛 1 頭当たりの乳量の増加により堅調に推移しています。また、衛生的乳質は酪農家や関係機関の乳質改善の努力により全道トップクラスの水準であり、少数ながら安定的な生産と堅実な経営努力により富良野農業の重要な位置を占めています。

しかし、酪農を取り巻く情勢は厳しさを増し購入飼料の高騰、離農などによる全国的な生産量の減退、また TPP 交渉等による先行き不安等がありますが、富良野市においても経営コストの削減、担い手の確保、自給飼料の確保、家畜伝染病の防疫対策徹底、家畜排せつ物の適正処理など、地域に応じた担い手の確保、自給飼料の拡大、経営の体質強化や支援システムの構築、安全・安心な生産に向けた取り組みを図る必要があります。



資料：市農林課

【飼料作物】

平成 26 年度の栽培面積は、約 2,009ha で飼養頭数の増加や飼料高騰等により年々自給飼料の作付が増加しています。しかし、農地の確保が容易ではなく、機械施設の整備、労働力確保、耕種との協力等が課題となっています。